

《翻 訳》

『コリヤード^{さんげろく}懺悔録』ポルトガル語全訳注

——日本語およびポルトガル語で記す「序」——

Tradução integral portuguesa da obra *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (Roma, 1632) da autoria do frei dominicano Diego Colhado: Prólogo em japonês e em português.

日 埜 博 司 (HINO Hiroshi)

本誌に「その他」の範疇で、流通経済大学創立 50 周年記念式典に、主賓のひとりとして列席してくれたアントニオ・フィダルゴ教授(ポルトガル共和国ベイラ・インテリオール大学学長)の祝辞を紹介した。

その随行者として来日したのが、外国人に対するポルトガル語教育の専門家として、これまで幾人もの本学生へポルトガル語を教えてくれたアナ・リタ・カリーリョ先生である。EU エラスムス・プログラムの一環として、毎年夏、UBI で開催される「外国人のためのポルトガル語夏季集中講座」については、これまで学内誌を利用して幾度となくふれてきたが、この尊敬すべき知友の来日が実現し、彼女にとって憧れの国であった日本の魅力を、私みずからの企画と案内によりお伝えできたことを、本当に嬉しく思う。

2008 年夏、上記の集中講座に本学生として初めて参加したのは、流通情報学科卒業生の村元マルコであった。リタ先生は、初めての日本人生徒としてマルコには滞日中ぜひ逢いたいと切望された。マルコは、ポルトガル語という特技をよく活かしている日本通運に就職したが、わずか数年で独立、現在は、ブラジルのハレの日に着用する衣装や装身具のデザインや販売を手がける工房を数名の仲間と経営している。本当に大したものだ。

11 月 12 日、学長主催の歓迎夕食会まで時間的余裕があったので、午前中、二重橋だの秋葉原だのを散策した後、フィダルゴ学長とリタ先生と私は、マルコと東京駅で落ち合い、エキチカのカフェで歓談した。ビジネスの順調な進展ぶりをみごとなポルトガル語で語るマルコのようすに、リタ先生もフィダルゴ学長も大いに満足なさっていた。

2008 年初夏、学術交流協定の更新をお願いしに私どもが UBI へ赴いた直後に集中講座への参加者がゼロ、という事態だけは何としても避けたいと思い、マルコに訪葡を懇請した私としても大いに面目を施すことができた。

目下初校の作業が進行中の標記『コリヤード 懺悔録 ポルトガル語訳全訳注』（ハル書店古書出版部より近刊）に関しては、2015 年夏も、例によって UBI のあるコヴィリャンへ赴き、最後まで手つかずであった「序」を、日本語とポルトガル語で執筆する作業に没頭した。コヴィリャン現地で記した「序」の一言一句へ、例年の如く、リタ先生の周到な指導と助言を賜わることができた。本誌にそれを掲げておく。

日本語の「序」で記したことだが、リタ先生が日本の諸事に対し、内発的な興味を溢れるばかりに懷いていてくれることが、私には何よりもありがたく幸福であった。日本語で記せばいささか面はゆく思われる彼女への謝辞も、ポルトガル語で記せば案外すっきりとしている、そう思われる一例として、当該のポルトガル語文をそのまま掲げることにより、彼女に対する満腔^{まんこう}の敬愛と感謝を、ここに改めて表す。

“Resta-nos desejar que as palavras acima declaradas exprimam, de forma justa e suficiente, a nossa genuína gratidão para com ela concebida.”

ポルトガル語文のほうがいささか長くなっているのは、本篇で日本語でしか記し得なかった内容を、少なくともその概要のみはポルトガル語の「序」において略記しておく必要を認めたためである。

序

16 世紀以降、アフリカ、インド亜大陸や中国を含むアジア、およびラテンアメリカの各地にカトリック布教を行なった南欧人宣教師は、それぞれ布教先の言語を用いて、一般信徒に向け、「カテキズモ」もしくは「ドチリイナ」と呼ばれる教理書を刊行し、彼らの告解を正しく引き出しこれを聴取するための便宜として「コンフェシオナリウム」と呼ばれる司祭用の一種のマニュアルを編纂した。

こうした文献の普遍性とは対照的に、外部へ漏らすことが厳禁であったはずの信徒の告解を、後続する同僚へ向けた日本語学習テキストの実用的例文たらしめるという巧みな口実のもと、その生々しい肉声をありのまま筆録した点において、『懺悔録』の史(資)料的価値および稀少性は極めて高く、その類書は世界にまったくと言ってよい

ほど見出すことができない。

『懺悔録』はまた、キリシタン時代、日本人信徒が、日本在来の伝統なり道徳と、新たに受容したカトリック倫理のはざまにあつていかなる心的葛藤を覚えたか、を知るための稀有にして良質の史料であるばかりでなく、16 世紀末から 17 世紀初めの日本語（特に西九州を中心とする西日本で話されていた日常的な口語）や、同時代における日本の社会・風俗・習慣を知るための貴重な証言の宝庫でもある。

『懺悔録(さんげろく)』の編者ディエゴ・コリヤードは、1620年代、禁教下の長崎およびその近隣でカトリック布教活動を行なったイスパニア人ドミニコ会士である。コリヤードはキリシタン迫害という苛酷な状況のもと、日本人キリシタンの懺悔(正しいカトリック用語では告解)を聴取し、それを話し言葉のまま、ポルトガル語式のラテン文字(いわゆるローマ字だが、特殊記号の助けを借りることにより、当時の日本語の音韻を写す手段として、現在のヘボン式や訓令式などより遥かに優れた有効性を持つ)で筆録した。『懺悔録』は1632年、コリヤード自身の編纂による『日本語文典』および『羅西日辞典』とともに、彼のいわば日本語関係三部作のひとつとして、ローマの布教聖省(プロパガンダ・フィデ)から出版された。

本作では、『懺悔録』で用いられるラテン文字テキストを整え、それを漢字かな交じりの日本文へ翻字し、その現代語訳を掲げた(第一部第 3 章)のち、『懺悔録』全篇をポルトガル語へ翻訳した(第一部第 5 章)。第一部第 3 章でラテン文字によるテキストを掲げた際、そこに現われる日本語語彙のほぼすべてについて、それぞれがどのような語義で使われているかを知るため、日本イエズス会版『日葡辞書』(1603年、長崎刊)に見えるそれぞれの語積(ポルトガル語で記されている)を脚注に示した。『懺悔録』には、ごく稀に『日葡辞書』にすら見えない語彙が現われるのだが、それらの語義はコリヤード自身が編み、『懺悔録』とともに刊行した『日本語文典』および『羅西日辞典』を参照することによって確かめた。

第一部第 5 章で訳者が試みたのは言うまでもなく現代ポルトガル語訳ではあるが、『懺悔録』に収められた日本人の告解が 17 世紀初頭のそれであることに鑑み、多少とも古格な味わいを拙訳に留めたいと考え、現代ポルトガル語世界の教養ある読者に理解可能と思われる範囲において、『日葡辞書』の語積に見える 16 世紀末から 17 世紀初めのポルトガル語をそのまま拙訳へ取り込む工夫をときどき施した。

『懺悔録』の内容を理解するに際して考えたことを、第一部第 4 章にまとめた。

その第 1 節では、日本人がキリスト教的な愛を表わす amor という語彙に接し、こ

れを「愛」という日本語の語彙に置き換えたときに避けがたく生ずるもろもろの不都合を回避するためキリシタンが考えついた「(御)大切」という語彙につき、多少の考察を行なった。『懺悔録』において、第一誠(「御一体のデウスを敬ひ、貴み奉るべし」)および第六誠(「邪淫を犯すべからず」)は、それぞれその中に最も多くの告解を含む。このことは、コリヤードがこれらの誠に関する告解により頻繁に遭遇し、しかも、彼個人として、当該ふたつの誠により大きな個人的関心を懐いていたことを示唆する、と言ってよいであろう。訳者としても、これらの誠に特に着目し、第 2 節および第 4 節において、なるべく広い視野から、日本人がキリシタンという新奇な宗教倫理を受容するに際し覚えたであろう苦悩なり葛藤に焦点を当て、それぞれエッセイを記した。第五誠(「人を殺すべからず」)に関する第 3 節では、堕胎・中絶・嬰兒殺害に関し、在日キリシタン宣教師がしたためた幾つかの報告をなるべく原文ともども紹介しつつ簡単な補説をまとめた。キリシタンが禁ずる自殺や、その念そのものを抱懷したこと、さらには刀の利鈍をヒトの生体もしくは死体で験した、などの告解が『懺悔録』にまったく見えぬことは、少なくともコリヤードの接した日本人キリシタンがいかなる社会階層に属する人々であったか、を推測させる手掛かりたりうるであろうと思考する。言うまでもないことだが、第 4 章で記述したことのエッセンスは、第 5 章で『懺悔録』のポルトガル語全訳注を掲げるに際し、簡潔に再構成して脚注にポルトガル語でも記述するよう努めた。

第二部「附録 1」として、日本イエズス会版『サルヴァトルムンヂ』の日本語テキストを翻刻し、聴罪司祭が日本人信徒からどのような告解を引き出すべきか、その手引きの具体的内容を示す尋問事項のかずかずをポルトガル語へ翻訳した(現代日本語訳も試みに作成した)。日本イエズス会版『サルヴァトルムンヂ』はカサナテンセ図書館(ローマ)蔵の一本が知られるのみのいわゆる天下の孤本である。全篇洗練された草書体の日本語で記される『サルヴァトルムンヂ』は、日本人信徒のみを対象とする聴罪マニュアルであるという点で、つまり、中世カトリック文化圏で刊行された類似の書には到底見出し得ない尋問事項が含まれるという点で、大いなる興趣に富むもの。今回収載するのはポルトガル語および現代日本語への抄訳であるが、信徒へ為すべき尋問事項はもれなくポルトガル語へ訳してあるから、欧米の専門家には多少裨益するところもあると思う。

キリシタン史研究に前人未到の境地を拓きつつある高瀬弘一郎教授の名論考から本書に関係の深い 3 点を選び、これをポルトガル語へ翻訳、第二部「特論」として収

載し得たことは、訳者の大いなる喜びである。これらの論考を初めてポルトガル語へ訳した際の経緯など明らかにするための一文をそれぞれの冒頭に添えた。私的な随想にすぎないが、肝心のポルトガル語訳に関する限り、キリシタン史研究の極北が執筆した労作を翻訳するという自覚のもと、最大限の丹精を込め作業した。

『懺悔録』著者コリヤードの略伝や『懺悔録』の日本における研究史、および原著の構成等をめぐる若干の疑問にふれる簡潔な解題を記したが(第一部第2章)、日本語のみの記述であるから、欧米人読者のため、コリヤードの生涯および『懺悔録』書誌に関する最低限のデータは、ポルトガル語で記した「序」(Prólogo)において把握できるようにした。

第一部第3章で行なった『懺悔録』のラテン文字による日本語原文テキストには、理由を明示したうえでおびただしい校訂の手を加えたのであるが、その作業に対する大方の批判を仰ぐため、天理大学附属天理図書館が所蔵する『懺悔録』初版本を、原色影印により全篇収載した(第一部第1章)。その許諾を与えてくれた天理図書館に深甚の謝意を表する。

第二部「附録2」として、1990年にポルトガル語圏諸国によって公式に採択された新正字法に関する協定の具体的概略と、それに関する若干の私見(その多くは残念ながら反対意見)を掲げた。新旧両正字法の併用を認める、とする移行期が本稿作成中の2015年に終了、新正字法が完全施行されて現在に至っている。本書の内容とは無縁のエッセイであること、百も承知のうえだが、拙著にポルトガル語テキストが多く含まれそこに一貫して旧正字法を用いた以上、そのような選択に踏み切った私なりの理窟——というか、大方のケースに関しありていに言えば、単純素朴な個人的好み——をやはり明らかにしておく必要を認めた。

南蛮文化館が所蔵する伝狩野派『南蛮人渡来図屏風』(16世紀末から17世紀初。重要文化財)には、告解を含む日本人キリシタンの宗教的所作が丹念かつリアルに描き込まれている。珍重すべきそれらのシーンを取り込んだ資料性豊かでしかも美麗なカバーを制作するための許可を、同館長矢野孝子氏より頂戴したことを特筆し、心からの謝意を表する。阪急梅田から一駅の中津界限にあるこの魅力的な個人美術館は、南蛮美術に対する深い造詣で知られた故北村芳郎氏によって創設された。北村コレクションの意義を正しく理解しうる研究者に対しては、これへ最大限の援助を惜しまない、という北村氏のフィロソフィが現館長にも脈々と受け継がれていると感じ、嬉しくかつ心強

かった。

拙作を仕上げるにあたり最も重要かつ決定的な役割を果たしたのは、私の親友で、外国人に対するポルトガル語の戦略的教育法を専門とするアナ・リタ・カリーリョ先生である。彼女の勤務するベイラ・インテリオール大学(以下、UBIと略称する)は、私が職を奉ずる流通経済大学と学術交流協定を、1993年以来締結している。2008年以降は、EUエラスムス・プログラムにもとづきUBIで開催される「外国人のためのポルトガル語夏季集中講座」に、ポルトガルに関心を懐く私どもの学生が特別に参加を許され今日に至っている。2009年からは、夏ごとに私も、生徒とともに、UBIの所在地コヴィリャンへ赴き、親しくリタ先生の教えるを受ける習わしなのだが、彼女はそのたび、忙しい講座の合間を縫い、私の作成してきたポルトガル語テキストに対し誠実この上ない全面的査閲を施すとともに、貴重な助言を惜しみなく与えてくれた。コリヤード『懺悔録』や日本の諸事に対し滲み出る内発的な興味に導かれるまま、そして、私の“文体”やら語彙の好みにまで配慮しつつ、快く優しく指導にあたってくれることが、私には嬉しく感動に堪えなかった。心からの尊敬と感謝をリタ先生に捧げる。

2004年度に私は、リスボア新大学の客員研究員として、ほぼ一年をポルトガルで過ごしたのだが、そのとき、若い歴史研究者ルシオ・デ・ソウザから享けた温かくも厚意に溢れた指導を忘れることができない。ルシオは『懺悔録』の比類ないおもしろさに興味を覚え、ありがたいことに、週一度私の大学寮に現われ、私があらあら作成し終えていた『懺悔録』ポルトガル語テキストのいわば第一次査読にあたってくれた。テキストは私に必ず音読させ、ポルトガル語文として耳に心地よく滑らかに響くかどうか、そして何より、訳文の“雰囲気”が日本語オリジナルのそれから大きく逸脱していないかどうか、にまで慎重な考慮を払いつつ指導にあたってくれるルシオの態度に接し、私は、この学究がいかにも文藝的センスに秀で、しかも翻訳の本質に通暁しているか、を強く感じたものである。ひとわりその日の査読を終えると、『懺悔録』の内容そのものに関する愉快的談論へ移るのであるが、多少おもしろいのではないと思われる注記を幾つか記し得たのは、ルシオとの対話から享けたインスピレーションのおかげにほかならない。

備忘録のつもりでひとつだけ例を挙げる。

『懺悔録』には「弱いキリシタン」(iovai Christian)という言葉が現われる。1620年代、迫害下の長崎。身分を隠しときに日本風の変名さえ用いて布教活動を続けるヨーロッパ

パ人宣教師へ一夜の宿を提供することは、絶対の義務とまでは言えなくとも、良心的な信徒にとり、危険極まりなく尋常ならぬ勇気を要する行動であった。ある信徒は周囲の圧力に屈し、日本古来の神仏の名に懸けカトリック宣教師には決して宿を提供せぬ、という誓文をしたためる。そのような“罪”の告解を聴いた司祭は、大略次の如き訓誡を与える。——そのような誓文を行なった者は、ゼンチヨ(異教徒)どもをはじめ権力者から、次のように思われるであろう。すなわち、たとえば愛宕八幡・阿弥陀なんぞに懸けて、南蛮坊主(ヨーロッパ人宣教師)に宿を貸しはせぬという誓文をなした者どもは、もはやキリシタンではない。控えめに見ても弱いキリシタンにすぎぬ、と。

この記述を見たルシオは、確かに彼らはもはや真実のキリシタンとは呼び得ないのではないか、という率直な疑問を私に呈した。日本キリシタン史をヨーロッパ的視点からの一方的解釈へ導くことを避けるため、私の見るところ、こうした「弱いキリシタン」に特徴的な行動なり心性を無視したり過度に軽侮したりすることはおそらく誤りである。私はそこで、「弱いキリシタン」の象徴的存在として遠藤周作の名作『沈黙』に登場するキチジロー——迫害に遭うや偽装的に教えを棄てはするけれど、パードレにめぐり逢えば、犯したばかりの罪を赦してくれるようひたすら哀願する、という行動を性懲りもなく繰り返す——の人となり、これに類するキリシタンはおそらく数限りなく実在したであろうという想像を前提にルシオへ紹介した。

本書の上梓を、おそらくは勇気を奮って決断してくれた八木書店古書出版部社長八木乾二氏と、担当編集者恋塚嘉氏に対しても心からの御礼を申しあげる。

2010年の錦秋、私はポルトガル共和国からメ리트勲記コメンダドル章なる栄典を授与されるという、まことにもって分不相応な誉れに浴した。拙作の上梓がその誉れを汚すデメリトとならぬよう衷心より願う。

Prólogo

O padre castelhano frei Diego Colhado (Collado) – que nasceu em Miajadas na província de Cáceres por volta de 1589, ingressou na Ordem dos Predicadores no Convento de San Esteban, Salamanca, a 28 de Julho de 1604, e faleceu ao largo da Ilha de Luzon (Lução) do Arquipélago Filipino devido a um naufrágio em Agosto de 1641 – é um dos missionários dominicanos que mais se dedicou às

actividades evangelizadoras em Nagasaqui e seus arredores nos anos 20 do século XVII. Sob a severa perseguição anti-cristã já iniciada desde os inícios do século XVII pelo xogunato de Tocugaua (Tokugawa Bakufu), o nosso frade fez incansáveis esforços para confessar os crentes japoneses e registou essas confissões em idioma japonês por meio das letras latinas cujo método de pronunciar é evidentemente português (não castelhano), letras essas que se revestem, com a ajuda de alguns sinais específicos inventados principalmente pelos jesuítas residentes no Japão, de mérito e várias conveniências de forma a representar bem fielmente os fonemas da língua nipónica no final do século XVI e no início do século XVII.

Publicada a presente obra *Modus Confitendi et Examinandi* (.....) ou *Niffon no Cotobani yô Confession* (.....) pela Propaganda Fide, Roma, no ano de 1632, juntamente com uma gramática da língua japonesa (*Ars Grammaticæ Japonicæ Lingueæ*) e um dicionário latim-castelhano-japonês (*Dictionarium sive Thesauri Lingue Japonicæ*), ambos compilados pelo mesmo autor, o nosso dominicano pretendia, segundo parece, fazer destas últimas obras um instrumento útil para uma explicação morfo-sintáctica da linguagem utilizada na presente obra, desejando destacar vantagens da aprendizagem antecipada do idioma japonês aos seus colegas ainda anciosos pela continuação das actividades evangelizadoras em terras nipónicas. Esta publicação constituiria, no nosso entender, uma prova de que o referido frade, pelo menos na sua óptica subjectiva, ainda mantivera a esperança de continuar a empresa em questão, tendo em conta o seu possível desejo e intenção.

Os missionários católicos que se dedicaram, desde os inícios do século XVI, à missionação e evangelização tanto na África, Ásia – na qual se incluem o Subcontinente Indiano, a China, o Japão, etc. – como em tantas outras partes das Américas Espanhola e Portuguesa, fizeram esforços não só para publicar *CATHECISMOS* ou *DOCTRINAS* destinados aos crentes nativos e escritos nos respectivos idiomas indígenas*, mas também para compilar *CONFESSIOINARIUM*, o qual poder-se-ia designar como “manual” a ser utilizado pelos confessores de maneira a induzirem os crentes nativos a fazerem confissões de modo correcto e eficaz.

* A Universidade de Salamanca publicou no ano de 1998 a edição facsimilada de um conjunto de 34 curiosas obras quatrocentistas e quinhentistas de *CATHECISMOS* ou *DOCTRINAS*, uma das quais tem por título *Doctrina Christiana en lengua Aráviga y Castellana* da autoria de Martín Pérez de Ayala (Valencia, 1566). Os referidos folhetos tratam-se de documentos do trabalho da autoria de Víctor Infantes intitulado *De las Primeras Letras. Cartillas Españolas para Enseñar a Leer de los Siglos XV y XVI. Preliminar y edición facsímil de 34 obras*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, 1998. Veja-se também Francisco de Pareja, *Doctrina Cristiana muy Útil y Necesaria* (México, 1578), ed. Luis Resines, Salamanca, Ediciones de la Universidad de Salamanca, 1990.

Em comparação com a universalidade dos livros pertencentes aos sobreditos géneros, afigura-se-nos relevante o valor de raridade da obra *Modus Confitendi et Examinandi*. As confissões dos crentes nativos, neste caso, japoneses, cuja divulgação foi (e ainda é, claro) rigorosamente proibida, são registadas ali de modo fiel e textual. O nosso dominicano, segundo parece, inventou um pretexto engenhoso de forma a que os missionários vindos daí em diante ao País do Sol Nascente encontrassem, nas sobreditas confissões, variados exemplos bons e úteis para a aprendizagem prática de um idioma japonês bastante coloquial. De qualquer modo, na qualidade de tradutor e anotador, julgamos seguramente que a natureza da obra aqui apresentada é espantosa e até excepcional, por não conhecermos nenhum outro livro semelhante, se bem que não tenhamos coragem de afirmar ser absolutamente a única deste género.

Neste modesto trabalho, procedemos, no Capítulo III, à fixação do texto original japonês elaborado pelo nosso frade por meio das sobreditas letras latinas à portuguesa, efectuámos uma transcrição do mesmo texto seiscentista através tanto dos ideogramas chineses (Kanji) como das letras fonéticas japonesas (Hirakana e Katakana), levámos a cabo uma adaptação para a linguagem moderna japonesa, conseguindo por fim realizar, no Capítulo V, a (uma) tradução integral portuguesa

a partir daquele texto original japonês, para além de transcrevermos o texto em latim, escrito de forma adicional pelo mesmo frade.

Aquando da fixação do texto original (Capítulo III), procurámos esclarecer o significado de quase todas as palavras que aparecem nesta obra de Colhado através da consulta da obra monumental intitulada *Vocabulario da Lingoa de Iapam* (Nagasaqui, 1603-04) cujo número de verbetes atinge aproximadamente 32000. Das palavras que constam na obra de Colhado, só algumas dessas não se encontram registadas no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* nem em outras fontes nipónicas, mas a sua interpretação, na maioria dos casos, torna-se possível, de uma forma afortunada, graças aos sobreditos dois trabalhos linguísticos da autoria do próprio dominicano, para além do interessantíssimo *Vocabulario de la Lengua Japona*, manuscrito autógrafo do mesmo autor.

Aquando da tradução integral portuguesa da obra *Modus Confitendi et Examinandi* (Capítulo V), optámos por utilizar, sempre que possível, várias expressões empregadas nas declarações do sobredito *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, procurando desta forma alcançar um sabor assaz arcaico no texto de tradução, sempre dentro do limite para a adequada compreensão dos leitores intelectuais de hoje. O emprego de expressões de respeito e cortesia no texto de tradução, a partir da óptica do idioma português, segundo presumimos, soaria por vezes um pouco excessivo ou exagerado, mas decidimos manter esse estilo de cariz honorífico, pois desejámos transmitir tanto quanto possível aos leitores um ambiente nitidamente peculiar ao idioma japonês antigo. Por outro lado, não hesitámos tanto em recorrer ao emprego de algumas expressões bastante vulgares, dada a relevante coloquialidade das vozes vivas dos crentes nipónicos, pertinente à presente obra.

Como julgámos que conviria, em especial, aos leitores japoneses, confirmar porque as condutas (ou pensamentos) dos crentes nipónicos apresentadas na obra de Colhado foram consideradas como pecaminosas na visão do catolicismo medieval, utilizámos a curiosa obra intitulada *O Cathecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz Bispo de Viseu*, na edição crítica elaborada por Elsa Maria Branco da Silva.

Sempre que citámos os trechos do mesmo *Cathecismo*, adicionámos a sua respectiva tradução japonesa, mas de maneira, confessamos, bastante livre e explicativa.

Para além disto, redigimos em japonês, no Capítulo II, algumas notas adicionais sobre a vida e a obra do Frade Colhado, algumas dúvidas relativamente à composição da presente obra, tendo escrito, no Capítulo IV, também em japonês, algumas anotações adicionais, um pouco pormenorizadas, relativas ao comportamento ou atitude dos nipónicos – nomeadamente crentes – perante os primeiro, quinto e sexto mandamentos de Moisés.

Nessas anotações redigimos, de acordo com a nossa curiosidade particular, várias observações, em especial, relativas aos «atritos» morais e psicológicos concebidos pelos crentes, quer antigos, quer recém-convertidos, perante a nova fé e a ética católica recém-aceite.

No que diz respeito ao primeiro mandamento (“Não haverá para ti outros deuses na minha presença”), esses «atritos» não foram sentidos nem experimentados pelos seus antepassados de nenhuma maneira, pois, o povo japonês, por longo espaço de tempo, não conhecera a única divindade onnipotente sob um clima religiosamente “ambíguo” e “brando”, clima esse que fora criado mediante a convivência com “oitocentos miríades de divindades” – de acordo com um dito comum nipónico –, na qual se contêm misturadas as xintoístas, budistas, animísticas, entre tantas outras.

Aqueles «atritos», no que se concerne ao sexto mandamento (“Não cometerás adultério”), deviam ficar, segundo cremos, mais sérios e severos, como é presumível através de uma olhada pelas 15 confissões relativas ao referido mandamento. Alguns leitores cristãos scandalizar-se-iam ao saberem dos actos dos nipónicos, já convertidos, por vezes, de índole infame, contrariando a ética sexual católica, tais como o adultério, o concubinato, o «Yobai»*, a sodomia, o onanismo, a desfloração, o aborto, o infanticídio, entre tantos outros. Contudo, na qualidade de um estudioso, não poderíamos deixar de afirmar, sempre de forma documentada, que tinham existido em vigor, no mesmo Japão “evangelizado”, alguns peculiares

códigos morais e sociais, códigos esses, pelo menos nalguns casos, que pudessem justificar aquelas condutas consideradas pecaminosas na visão dos valores católicos.

* Veja-se a Secção 4 do Capítulo IV.

No Japão, ainda hoje, em alguns templos xintoístas, realizam-se nos dias festivos certos bailes de cariz folclórico a serem dedicados aos Camis, nos quais são representados vários gestos eróticos evocando de forma implícita os actos sexuais efectuados pelo casal. Estes gestos, actualmente, são interpretados só por homens mascarados. Estas representações, segundo cremos seguramente, são reflexo do sentimento dos nipónicos – mais concretamente dos lavradores – desejosos pela abundante colheita do «Gococu», ou seja, «*Cinco cereais, ou legumes. idest. Come, mugui, aua, qibi, fiye. Arroz, trigo & ceuada, painço, milho zaburro, & hum certo milho preto*» (*Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.120). Aqueles bailes, por outras palavras, representam os sinceros votos feitos pelos lavradores de forma a festejarem antecipadamente a abundância das colheitas. A ética sexual católica só aprova os actos sexuais levados a cabo pelo casal legítimo, reconhecendo-os como um «mal necessário» a ser perdoado sob a única condição de visar a procriação. Perante esta doutrina, relativamente ao sexto mandamento, parece-nos naturalíssimo terem sido provocados vários «desencontros» entre a maioria dos mestres europeus e alguns catecúmenos nipónicos, como se esclarece no Artigo Especial 1. (Utilizamos aqui a expressão “a maioria”, pois conhecemos algumas evidências de só alguns religiosos europeus terem sido quebrantadores do referido mandamento, esquecendo-se das admoestações por eles próprios dadas junto dos seus discípulos japoneses.) Quanto ao conceito para com o sexto mandamento, de qualquer maneira, não poderíamos deixar de dizer que sempre predominava um ambiente conflituoso entre ambas as partes, um fenómeno semelhante ao da mistura da água com o óleo, de acordo com um dito comum nipónico.

Escrevemos, no mesmo Capítulo IV, um outro pequeno ensaio acerca da

palavra japonesa quinhentista e seiscentista «Gotaixet». Os vocábulos japoneses tais como «Ai», «Aigiacu» e «Aisuru», os quais se traduzem respectivamente de forma literal em “amor”, “sentimento amoroso” e “amar”, tinham sempre, a partir do ponto de vista do pensamento budista, um conceito bastante negativo e por vezes conduziam a uma associação ao comportamento erótico. Os missionários que evangelizavam as terras nipónicas não demoravam muito tempo a aprender o “perigo” ao utilizarem a palavra «Ai» e outras semelhantes, e encontraram a palavra «Gotaixet» – cuja forma básica é «Taixet», antepondo-se a partícula de respeito «Go» –, provavelmente, com a preciosa ajuda da elite intelectual dos japoneses convertidos, tendo conseguido, com sucesso, exprimir o “amor” na pura e católica acepção da palavra.

Quanto às anotações adicionais acima mencionadas do Capítulo IV, registimo-las em idioma japonês, mas tentámos apresentar, mesmo de modo resumido e parcial, o essencial dos seus respectivos conteúdos no Capítulo V na forma de rodapés.

Apresentámos, no Capítulo I, o texto original da obra *Modus Confitendi et Examinandi* conservada na Biblioteca de Tenri, Universidade de Tenri, Nara, através da impressão do seu facsímile colorido, de forma a que pudéssemos usufruir da crítica geral, não só para com as opções para a fixação do texto levadas a cabo pelo tradutor, mas também para com a tradução integral portuguesa da presente obra.

Escolhemos três ensaios, da autoria de um historiador ilustre na esfera do «Século Cristão» do Japão – Takase Kōichirō –, estreitamente relacionados com o conteúdo da presente obra e traduzimo-los para português com o maior esmero possível. Adicionámos também os respectivos textos originais japoneses anteriormente publicados em várias ocasiões, apresentados, na Segunda Parte, sob o título de Artigos Especiais.

Encontra-se reservada na Biblioteca Casanatense, Roma, uma obra impressa intitulada *SALVATOR MVNDI* ou *CONFESSIONARIVM* (1598), escrita numa caligrafia japonesa bastante requintada, cujo local de impressão não é conhecido.

Enumeram-se nesta obra, de forma concreta, várias interrogações a serem colocadas pelo confessor ao confessado acerca dos dez mandamentos de Moisés e sete pecados mortais. Trata-se de um curioso documento elaborado no contexto de uma grande empresa de publicações realizada pela Companhia de Jesus no Japão na segunda metade do século XVI e nos inícios do século XVII. A título de referência, não se conhece nenhum outro exemplar senão o conservado nesta biblioteca italiana. A obra *SALVATOR MVNDI* ou *CONFESSIOINARIVM* tem como destino exclusivo, por excelência, os crentes nipónicos, algo que é evidente pelo facto de se incluírem aí algumas interrogações relativas aos actos considerados abomináveis e crudelíssimos a partir dos valores da cristandade católica europeia. Esses actos não foram certamente referidos em qualquer outro *CONFESSIOINARIVM* publicado no Portugal medievo. De molde a podermos avaliar e apreciar as confissões colhidas pelo frei Colhado com uma maior curiosidade, apresentámos, na Segunda Parte, sob o título de Apêndice 1, uma tradução integral portuguesa dos Capítulos IV, V, e VI da obra *SALVATOR MVNDI* ou *CONFESSIOINARIVM*, nos quais se contém todas as interrogações em questão, juntamente com uma leitura diplomática do documento original japonês e a sua transcrição para as letras latinas à portuguesa, ou seja, utilizadas pelo nosso frade castelhano.

Redigimos, na Segunda Parte, sob o título de Apêndice 2, uma pequena introdução ao Acordo Ortográfico assinado em 1990, juntamente com algumas considerações pessoais relativas às alterações causadas pelo dito Acordo. Já tendo entrado em vigor o Acordo no ano corrente de 2015, como se vê, no presente trabalho, escrevemos todos os textos em português de acordo com a ortografia antiga, não por uma razão em concreto, mas porque simplesmente gostaríamos de continuar a escrever por meio de uma ortografia mais agradável e que nos é familiar. Mesmo assim, apresentamos algumas modestas razões pelas quais não poderíamos deixar de nos opor a algumas regras estabelecidas pelo Acordo. Tomemos como exemplo a palavra «pé-de-altar» que aparece no Artigo Especial 2, à qual não poderíamos, de maneira alguma, retirar os dois hífens, por ser considerada, na nossa óptica, como sendo uma palavra perfeitamente “madura” e

compreensível, só através do emprego dos hífen.



Gostaríamos de dirigir os nossos sinceros agradecimentos e o máximo respeito ao historiador Takase Kōichirō (Professor Honoris Causa da Universidade Keiō, Tóquio), que tem aberto de forma constante os novíssimos horizontes na pesquisa do «Século Cristão» do Japão, através da investigação minuciosa das numerosas fontes inéditas conservadas no Archivum Romanum Societatis Iesu e vários outros arquivos. Sentimo-nos privilegiados perante a sua amabilidade ao ceder-nos a autorização de apresentar, neste trabalho, aqueles preciosos ensaios juntamente com as suas respectivas traduções portuguesas.

Agradecemos cordialmente à directora Yano Takako do museu particular Nanban Bunkakan, Ōsaka, filha do fundador deste excelente museu Kitamura Yoshirō na nossa memória, pela sua imensa gentileza ao autorizar-nos a utilizar as fotografias de algumas cenas vistas nos preciosos Biombos Nanban, obra-prima dos fins do século XVI ou nos inícios do século XVII, atribuída a um pintor da Escola Canō (Kanō) e conservada no mesmo museu. Estes biombos são dignos de grande nota, pois neles são representados alguns actos e gestos dos crentes japoneses de índole católica, tratando-se, bem surpreendentemente, da única obra na qual se desenha uma cena do acto de confissão, confissão essa que é efectuada por um samurai ajoelhado sobre um tatami azul junto a um jesuíta vestido de preto. Alegramo-nos por ter sido possível utilizar a presente cena como um belo componente da capa do nosso livro.

A personagem que desempenhou o papel mais importante e crucial no aperfeiçoamento deste trabalho é a minha respeitável amiga Ana Rita Carrilho, professora da Universidade da Beira Interior, Covilhã, especializada em ensino estratégico da língua portuguesa como língua segunda ou estrangeira principalmente destinado aos alunos estrangeiros. Desde o ano de 2009, ela dedicou o seu tempo precioso à correcção integral de todos os textos redigidos pelo

tradutor e anotador em português, tendo-nos proporcionado de forma amabilíssima inúmeras orientações e sugestões de molde a contribuírem para uma melhor realização deste trabalho. Todos os conselhos e observações por ela oferecidas durante as conversas, nos cafés e esplanadas aqui e ali existentes na agradável cidade da Covilhã, transfiguraram-se, sem excepção nenhuma, nos nossos verdadeiros tesouros e sempre tentámos fazer os melhores esforços por concretizá-los nos nossos textos, quer em português, quer em japonês. O que nos agradou e emocionou mais é que esta investigadora nos orientou e ensinou, sempre nos mostrando um profundo interesse e simpatia nascente em si própria tanto pela obra de Colhado como pelo nosso trabalho. Resta-nos desejar que as palavras acima declaradas exprimam, de forma justa e suficiente, a nossa genuína gratidão para com ela concebida. Sentimo-nos, ao mesmo tempo, orgulhosos ao poder apresentar o nome desta estudiosa como sendo uma colaboradora na verdadeira acepção da palavra.

Não nos esquecemos da imensa cordialidade para nós mostrada pelo nosso amigo Lúcio de Sousa, investigador especializado em história da Expansão Ultramarina Portuguesa mais nomeadamente no Extremo Oriente. Quando permanecia, no ano de 2004, na Universidade Nova de Lisboa na qualidade de investigador visitante, ele teve a grande gentileza de aparecer uma vez por semana na nossa residência universitária, de forma a nos proporcionar uma grande ajuda no avançamento do nosso trabalho, no que se refere tanto à tradução portuguesa do texto original japonês, como à redacção de várias notas. Graças à inspiração que gozámos deste excelente jovem investigador, conseguimos, segundo pensamos, escrever algumas notas realmente curiosas.

A título de memória, cabe-nos apresentar só um exemplo. Na obra *Modus Confitendi et Examinandi* consta uma palavra «iovai Christian» – cuja tradução literal é “cristão fraco” – de forma a representar o (tipo de) confessado que jurou, devido à opressão por parte das autoridades xogunatas, de não prestar refúgio aos religiosos de «Nanban» – missionários europeus – em nome de várias divindades xintoístas e budistas. O jovem historiador mostrou-nos uma franca suspeita,

afirmando que este «iovai Christian» já não poderia ser denominado como verdadeiro cristão. Foi graças ao seu comentário que nos surgiu uma ideia de comparar o comportamento do «iovai Christian» com o de uma das personagens secundárias de nome Kichijirō que aparece na obra-prima *Chinmoku* (*Silêncio*) da autoria do escritor católico japonês Endō Shūsaku (1923-96). Kichijirō, uma figura simbólica do «iovai Christian», sempre se porta nesta novela de uma forma igual e repetida, isto é, abandona de modo fingido a fé sempre que é perseguido, mas pede ao confessor para absolvê-lo do pecado há pouco tempo cometido. Afigurou-se-nos um pouco inesperada a observação deste investigador, pois deveria ser difícil, segundo julgávamos, chegarmos a uma compreensão adequada relativa à mentalidade da maioria esmagadora dos cristãos sob a perseguição, não tendo sentido devida compaixão pela sua sagaz maneira de se comportar, por meio da qual a camada representada pela palavra «iovai Christian», no nosso entender, sempre procurava a sua sobrevivência. Trata-se de uma existência que nos pareceria perdoável, existência essa que sempre nos oferece vários assuntos a ponderar na pesquisa do «Século Cristão» do Japão.

A nossa especial gratidão dirige-se a Yagi (Yagui) Kenji, presidente da Editora Yagi Shoten Kosho Shuppanbu, e a Koidzuka Yoshiki, nosso editor responsável, que decidiram de forma corajosa realizar a presente publicação.

Antes de encerrar este Prólogo, algo extenso, esperamos sinceramente que o nosso modesto trabalho faça jus à generosa condecoração com que fomos agraciados pela República Portuguesa, no Outono de 2010, como Comendador da Ordem de Mérito.

Hino Hiroshi